

講 演

獨逸外科雜感

大連醫院外科醫長 醫學博士 松 本 彰 述

私は昨年京都府立醫科大學の横田教授と一緒に、印度洋を通り、伊太利を経て、獨乙へ入りました、その後在留期間の大部分を Berlin で過し、その Charité 病院の病理學研究所の Prof. Roma の所で物理化學の實習をして居ましたので、所謂見學をする餘暇に乏しく外科の見聞がすくなく、従つて、お話しする材料の甚だ少いのを遺憾に存じます。

獨乙の外科の進境と一言に申しますとそれは日本の外科と大差はありませんが、臨床的仕事の仕方が多少ちがふ様であります。大學の教室を比較しますと、この京大のやうな日本の大學の Klinik の方がむしろすぐれてゐる點があるやうに思はれます。しかし大學以外の公立又は私立の病院での仕事の仕方は、日本のそれよりもはるかに勝つて居ます。その具體的なことは後でお話する事とします。

御承知の様に、獨乙の各大都市には大抵大學があるので、それには各科の Klinik が具はつて居ます。しかし地方に行くると市立の病院が大學の Klinik になつて居ます。例へば Berlin の Charité, Langenbeck, Heidelberg の Enderlen の Klinik, München の外科等は大學直屬の病院で即ち國立ですが、他の都市では Städtisches-Krankenhaus の Klinik が大學の Klinik で大學の先生方がそこで仕事をします。だから、訪ねて行く時にも、大學の Klinik と尋ねても解らないことがあります。例へば Frankfurt a. M., Würzburg での様に Hotel あたりで Universitäts-Klinik と尋ねると「Universität はあそこだ」と言はれて病院と全然反對の方向にある Universität に案内せられることがあります、又 Würzburg の Städtisches Krankenhaus のやうに特別の名がある事があります、そしてそれが大學の Klinik なのです。Würzburg のは Luitpold Krankenhaus といひます。スписでも名がちがつて Zürich では Kantonspital, Bern では Insspital と言ひます。

さて獨乙の外科の大家で大學の Klinik の先生連を考へてみますと Berlin では Sauerbruch, Bier, Borchardt, Heidelberg の Enderlen, Tübingen の Kürschner, München の Leber, Frankfurt の Schmieden, Halle の Völker, Zwickau の Braun, Breslau の Küttner, Förster 等が代表的の人々であらうと思ひます、Kiel の Anschütz, Köln の Haberer, Würzburg の König 等も一流の人々であります。(この様な偉い先生方を呼びすてにするのは失禮であ

りますがゆるして頂くことにします)。併し訪ねて行つて、表へ出て考へて見ると、唯訪ねたと言ふことだけで何の感想も残らぬ事があります。これは私の注意の不足もありませうが又一面その印象がうすいともいへます、それで今から私の頭に残つた感想を主として前述の人々の中の幾人かについてお話し度いと存じます。

先ず Berlin の *Sauerbruch* でこれは Charité の外科の Chef であります、Charité の Klinik は建物も新しく立派で、患者は色々な種類のもので澤山来るので活気があり、そこではなにか知ら仕事をし、なにか知ら進めて居ると言ふ感じがありました。獨乙の他の何處にもこんな感じのする所はありません。*Sauerbruch* は誰でも知つて居られるやうに大變肌ざはりの荒い人であつて傲慢で仲々人に會はない、會つても三分位いで追ひ出すといふ風な人であります。しかし、その精力と努力とに於ては獨乙中での第一者であります、助手を叱りとばしてでも兎にも角にも仕事を思ふやうにすゝめてゆきこの大きな Klinik をよく funktionieren させてゆくところに彼 *Sauerbruch* の強味があります。手術場の模様、講堂の様子は京大のものと同様に眞白で綺麗です。一般に獨乙の他の大學のものは小さくてきたないのです。廣いとは言つても京大の様に大きくはありません。そして手術室での消毒の仕方、aseptische Deckung とか機械の準備は殆んど京大の夫れに似て居ます、助手も割りに多く、皆手を綺麗にしてはいます。獨乙の先生方は自分で手術するので一度にいくつもの手術臺がたつと言ふことはないのです。それで澤山の助手が同時に手を洗つて用意すると勢ひ介助の手がふえるのです。*Sauerbruch* の手術する態度は熱心で常にその際なに物かを發見しようと言ふ様な所が見えます。従つて助手の介助振りに一寸まづい事があると大聲でしかります。これは誰もが言ふ事ですが、見方を換へると、先生が大變熱心さを有つて手術をしておるのですから助手もその意を體して同じ様な鋭意を以て介助せねばならぬわけで、そう思ふとかゝる場合しかられるのが當然で助手の方が悪いのであります。しかし、それがあまりひどいときには助手も更に進むべき方向を迷つて、何うして良いか解らぬ様になつて更に叱られて終には新手の助手と交替する事があります。(笑ひ聲おこる) 例の有名な胸部の手術は大變多く従つて Rippenresektion などは手にいつたものです。又 *Sauerbruch* は前に甲状腺腫の研究をしたことがあり、手術も大變澤山やつて得意な様です。助手もかういふ手術には馴れて居るので過ちはありません。しかしこの Klinik に集る患者の種類は前に申しましたやうに廣くして種々の患者が来るのですから、助手がしかられるのは大抵腹部内臓の手術であります、殊に胃腸吻合であります。斯くこの教室は見學に行くと助手も緊張し、看護婦も緊張して居てまことに氣持よくみられますが、時に *Sauerbruch* 自身が芝居じみたことをします。例へば甲状腺腫の手術をする時にこれが癒着して居て Operation がむづかしい、その時たまたま各國から見學生が澤山集つて

居るといふ様な場合に彼は例の如く熱心に手術をしますが腫瘍をとつてしまふと両手を開いて見學生の方に向つて „So radikal!” と呼び、こんなに上手にとつたぞ、といはぬばかりの風をします。まことに大學教授としてはあるまじき態度であります、又つまらないことをガミガミ言つたりするのをみますと尊敬する念が多少すくなくなります。

Sauerbruch の教室には又獨乙の他の大學の Klinik にないやうな立派な實驗的研究がありまして教員が實驗的研究をしてゐます、これは稀に見る所で殊に地方の大學ではかかる研究をする人々は夫々の Institut に行かなければなりません。日本でも先年來知られてゐる結核の減食鹽食療法は *Sauerbruch* の所が本家でありまして、これの爲に別に病棟がありますが、これはかつて *Sauerbruch* が南から Berlin に來る時に、これを建てて呉れなければと言つたので別に建てたのださうであります。*Hermansdorfer* と云ふ助教授が夫婦でこれをやつて居ます。*Fr. Hermansdorfer* 自ら調理室で働いて居ます。私が行つた時には、丁度 *Sauerbruch* がその業績を持つてエジプトのカイロに講演に行つて來たあとで、寫眞表などが一所に集つてゐまして好都合でした。一言に申しますと皮膚の結核には良いが肺骨等の結核には左程の効果が無いと言ふことでした。

Sauerbruch の所に *Nissen* と云ふ助教授が居ます、この人はずつと前から *Sauerbruch* の下で働いて居る人で *Sauerbruch* が Berlin に來る時一緒に來た人でありまして、若いがしつかりして居て、*Sauerbruch* の留守の時にはその一切を預つてゐます、その手術振りを私も見ましたがまことに平靜で用意周到であつて、胃腸の手術では注意の深い點に於て或は師を凌ぐ點があるかも知れません。思ふにこの人が *Sauerbruch* を助けて行くので *Sauerbruch* の教室が今日の活氣と充實を示して居るのでありませう。

次に *Bier* であります、この人は古い有名な人で *Langenbeck* 病院の外科の Chef であります、臨床講義の時だけ Operation をし、講義をしながら手術をしてゐますが大變圓滑な手術をし、講義がこれに伴ふので開いて居て大變よいものであります。*Bier* 自身は實に用意周到であつて且つ永年の經驗で實に馴れたよどみのない手術をしますが、少しも進んで行こうと云ふ所がなく、十年一日の如く舊を守る風に見えました。消毒も簡單で aseptische Deckung も至極簡單であります。驚くべきことは primär に閉づべき手術創でも一部開けておくのですが、このことは Aseptik と云ふことが不完全だからとも思へるし、又かやうに創を二次的に處置するから消毒が少々不完全でもよいとも思はれます。かやうに教室の仕事のやり方は舊式であります、何んといつても *Bier* は北獨乙では大變な人望を有つております。今年 4 月 *Bier* は老年のため引退し、後任なしとの理由でこの Klinik も閉鎖されました。

Borchardt は Berlin の市立の *Moabit* 病院の外科の Chef であります、この人は年が相當

行つて居ますが非常に綿密な人で、廻診及び手術の際には必ず秘書を伴れてゐます。これに所見を口述し筆記せしめ、後に「タイプライター」で打たせて「カルテ」に貼りつけて居ます。又患者に就いて検査すべき事項の結果も Praktikant が「タイプライター」で打つて「カルテ」に張りつけておきます。

Borchardt は廻診の時、自分でこれを精細に讀んで自分の見た所見と合致しない所見があると質問をして、Praktikant から合理的な回答を得るまで中々徹底的にやります。検査の仕方の上に缺陷があつたりすると質問は益々急であります。かような場合には受持醫員もホトホト困つて了ひますが、此處に中々シツカリした Oberarzt がゐまして、かゝる場合に中々上手にその急を救ひます。(笑聲起る)。この Oberarzt は中々シツカリしてゐてよく醫員のやることを監督し世話してゐました。従つて醫員の中には何でもこの人にたより氣味の他力主義者もありました。此處の手術場は狭くて、粗末で、大學の手術場とは思へません。或る時 Hirntumor の手術を見ましたが、その時 Tumor はこれを Diathermic-messer でけずりとるやうにして少しづつとつてゆきました。此の時、助手が Galvanothermometer で時々その Tumor のとれてゆく部分の溫度を計ります。他の手には紙を持つてゐましたがそれには、種々な Hirntumor の溫度、Hirn の諸所の溫度が記されて、Kurve にしてあるのです。即ち實測した溫度をこの曲線に照合して果して Tumormasse はすでに全然とれたか否かを検査しながら手術を進めてゐたのであります。

Borchardt は最初から最後まで全部自分で手を下し、手術所見は口述し、秘書に筆記させてゐました。これらの事柄は彼 *Borchardt* の綿密さと眞面目さを示すものと思ひます。手術の介助は看護婦1人と助手2人で、他の助手は合羽だけで見學してゐます。そして己れの介助する番が來ると手を洗つて用意してゐました。すべて甚だ靜肅でありました。*Borchardt* は實にひしきよき指導者の1人であると信じます。唯彼の Klinik は市立病院の Klinik であるために面白い症例が多くは來ないやうで彼のために惜しむべき事でありました。

Heidelberg の *Enderlen* はすでに老人であります但皆さんも知つて居られるやうに獨逸第1の手術の上手な人として人望の高い人でありました。北ドイツで聞くと *Enderlen* の有名なのは南ドイツだけのことで北ドイツでは何といつても *Bier* が第一人者だと言つて居ました。

Heidelberg は京都の様な感じのする處で Neckar 河が町の中を流れてゐて、町の向側に東山の様な山があります。*Enderlen* の Klinik には大變多くの Kranke が方々から集まります。大學の建物も大變古くて、小さく、古い大學としての趣があります。多くの手術は臨床講義室で行はれ、その隣りに2つの手術場があつてこゝでも同じやうに行はれます。助手は皆んな手を洗つてやるのですが *Enderlen* は甲狀腺腫とか腎臟結石とか大きなもの

だけをやり、Hernia とか Magendarm の Anastomose 位までは古い助手が Leiter として附いてやつてゐます。此點は京大とよく似て居ます。Enderlen の手術振りはすでに定評がある通り、まことに順序よく、すこしのとどこほりもありません。癒着の多い甲狀腺腫でもすこしの停滯なしにすらすらと進んでゆきます。しかしながら何れも型通りの手術であつてちつとも進んで行こうとする處が見えません。幾度見てもいつも型通りと言ふ恨があります。別に病棟の中に手術場があつて、これは小さいが大變立派で、私はたまたま件れて行かれたのですが、ここでは Enderlen が他の醫師から頼まれたものだけをやるやうであります。助手はいつも古參の人 2 人、看護婦は婦長と古參の手術介助婦で、いつでもその顔振れがきまつて居て、なほその上にいつも 1 人か 2 人醫師らしい見學者がいました、そして Enderlen は手術中精細にその所見をこの見學者に説明するのが常でありました。其處は講義室から大變離れて居ますが、Enderlen はその間をあちらへ行つたり、こちらへ行つたり實に根氣がよいものでありました。高齢に到るも猶その本分を忘れずに己れの仕事に精進する彼の態度は實に推奨すべきものであります。

Heidelberg からすこし南東に Tübingen といふ處があります。横田教授がかつて此席上(京都外科集談會昭和 6 年 12 月例會)でいはれた如く、ここは福知山と言ふ感じのする町でありまして、Neckar の上流がまんなかを通つて居ます。驛を降りると大きな立札があつて、それに „Zur Klinik” と書いてあつて全く大學の爲にある様なものです。大變不便な坂の多い小さい汚い町ですが、大學のある邊りは、道も廣く大學の建物も大きくて、立派な大きな町と言ふ感じがします。

此處に Kirschner がゐます。私はしばらく獨逸に居りまして、すこしばかりの見學をしたのみであります。今考へて見ますと獨逸で人格から言ひましても、仕事のやり振りから言ひましても、おそらく Kirschner の右に出る人はないだらうと思ひます。この人は年寄りではなく、大變綿密で根氣よく仕事をし、日本人が見學にまゐりましても實に丁寧で親切に見せて呉れます。ここも小さい手術室 2 つと臨床講義室とがあつて、まづなにより目につくのは色々の器械が澤山あることであります。例へば Stativ にとりつけた Irrigator のやうな「ニツケル」製の器械があつて、尋ねると局所麻酔液の容器だと言ふことであります。即ちそれから長い管で針に連続してあるのです。管と針のつき目に Knopf 様の開閉装置があつてそれを押へると液が針を通つて出るのであります。だから、注射器で吸ひ上げる要がありません。局所麻酔は先ず皮下に注射し、皮切を加へてから筋膜下に注射してゆくと言ふ風に schichtweise にやつて居ました。又腎臓や直腸の手術を Lumbalanaesthesia でやつておました。この場合又面白いやり方をして居ました、理論上のことを聞くと今に發表すると言ふて判つきりと説明して呉れなかつたのですが、器械は一つの U 字管がありまし

て、その一方は太く一方は細く、共に目盛のある注射筒になつてゐます。兩管の接合部の中央に Hahn がありこれから管で針につゞいてゐます。この Hahn を廻す事によつて太き管からのみ、又は細き管からのみその内容を注出し得るのです。太き方には空気が入れてあり、細き方には麻酔液が入れてあります。これを押し出すには「ピストン」がねじ仕掛けでありますので、ねじる事によつて徐々に注出します。麻酔薬は「ペルカイン」を用ひて居ました。患者の位置は常に 20° の Beckenhochlagerung にして、腰椎 I-II 間で先づ脊髄液を 15cc 採り、次に針を U 字管に絡ぎ太い方から空気を 10cc ほど入れて、細い方から 2—3cc の麻酔液を入れてしばらく待ちます。その間に足から上方へ次第に麻酔部を検査して、必要な處まで麻酔しないと再び空気 2—5cc 位と麻酔液 2—3cc とを入れて待ちます。かかる事を 3—4 回繰り返すと 20 分程でほぼ Nabel の部分まで Anaesthesia があらはれて来るのです。腎手術の際の普通の皮切を加へるにはこれだけの麻酔では不完全でありまして、例の局所麻酔を盛にやつて補つて居ました。Kirschner の手術振りは Enderlen に似てゐます。器械を實に器用に使ひます。そして細心の注意を拂つて停滯する事なく不必要な細織の損傷を加へぬ様に實に氣持のよい綺麗な手術をします。筋層はいつも Diathermiemesser で切ります。直腸癌手術の時に直腸を離断するのに一種の Quetzchzange を用ゐて居ました。離断と同時に断端が縫合せられてゐるものです。手術は毎日朝早くから 4 時間 5 時間續けてやり、最初から最後まで態度に些かの變りなく實に energisch な人で、その精力と根氣には敬服します。常に平靜で考へながら進んでゆく人で粗暴の點はなく、助手ものんびりとゆつとりやつて行く事が出来て、助手と先生とがその動作に於てよく調和し、見て居て感じが良いものでありました。かく教室員が氣持よく一致し上にかく立派な Chef を頂いて、その意を體して仕事をしてゐますから今後に於て必ず種々の立派な業績を擧げることと思ひます。今後獨逸へ行かれる方々は此處へは是非行つて見るとよいと思ひます。Tübingen は定型的の ドイツ の田舎町で大變淋しく、夜は 9 時 10 時になると人通りがすくなくてこつこつと歩く巡査の靴の音のみが聞えます。Nackar の流れは清く、雨の日などその風景はよろしい、魚が釣れますから、釣りでもして吞氣に勉強する人にはよい處だと思ひます。

München は私が始めて獨逸で踏んだ土地なので大變懐しく思ひます。此處には Lexer がゐます。Lexer の所には澤山の成形手術を要する患者が集まります。一般に成形手術といふものは、私の見聞のすくない精か、大變ぎこちない感じのするもののやうに思つてゐましたが、ここでは大變圓滑にゆくものだと思はせられました。口唇の成形手術、關節の成形手術等を見ましたが常に些かの停滯もなく思案にくれる事もなく行はれました。勿論 Lexer が多年の經驗家であるのですから、當然といへば當然かも知れませぬが、彼がその

一つ一つの例をよく眞面目に取扱つて來たからであらうと思ひます。手術場もドイツの他の大學に比して綺麗な廣いもので、助手の働きも看護婦の働きも、大變京大のそれに似て居ました。Lever は成形手術の大家として是非みる必要のある人であります。

Frankfurt a. M. の Schmieden は理路整然たる講義をするので有名な人であります。その爲に大變澤山の學生が集まつて來ます、この Klinik に來る患者の種類は少し偏つてゐて骨折が大變多く集まつてます。なぜだか私には解りませんが、第 1 にその土地が商業地であるといふ事と第 2 に Enderlen のゐる Heidelberg に近いといふ事とに因すると思はれます。此處に肝臓の研究をして居る人

があると言ふことを聞いて居たので、尋ねて見ましたがその人はとつづくに去つて、その後さう云ふ事をする人もないといふ事でした。なほこの病院で病舎の繃帶交換を見ましたが古い看護婦がやつてゐました。大變清潔にして正しいやり方をしてゐました。その際 Osteomyelitis が大變多く、その深い Fistel に何か錠劑を入れてその上から「タンポン」をしてゐました、聞いて見ると發生機の O₂ が出るのだと言ふことでしたが、齒科に用ひる含嗽劑の錠劑でありました。こんなものをよくしらべもせず唯効くと言ふので用ひるらしいのです。

反歌
男兒かも益荒雄かもと呼ぶ人の
ありとも知らに 山聳ゆらむ

遠霞 裳とうちまとひ
しかすかに静けき山も
人の世の有様みれば
八谷より黒雲起り
その風は息吹きと猛り
振り上ぐるしもの光り
天も地もふるひ慄き
さばかりの怒はあれと
峯も尾も呼へは應へぬ

山のみはいたく静けし
しかすかに動かぬ山も
うれたしと嘆きやすらむ
麓には木の葉さやけり
その雲にあやめもわかす
撃ち下ろす音のはたつき
人の子のひれ伏す見すや
雨雲のはれたるあした
山こそは男兒なれや
益荒男なれや

Würzburg は舊い商業都市で、この病院は宗教的色彩の非常に濃い所で看護婦はみんなカトリックの尼さんの様な服装をして、大變静かでありました。ここでも多くは骨折で、Chef である König は一種の骨接合器を發案して用ひてゐました。それは日本にある前田式骨接合器と寸分たがはぬものでありました。此處のもう 1 人の教授は Hübler といつて今獨逸で外科方面で物理化學的の仕事をして居る唯 1 人の人であります。小さな研究室を持つて居ますが、仕事はあまり進まないやうでありました。

この様に大學の教室は大同小異であります。地方の都市の市立病院は大學の Klinik ですが、Berlin には大學の Klinik でない市立のものがあります。その代表的なものに就いてお

話しませう。

Berlin に Virchow-Krankenhaus と云ふのがあります。大きさ設備に於いて他の市立病院よりすぐれて居ます。建物は京大のそれと全く同様で平家です。外科の先生は *Mühsam*, *Unger* と云ふ2人で、ここに集る患者は Berlin の市街から來るのが多く、外傷が多く、殊に多いのは銃創であります。病舎にもかかる患者が枕を並べて居ます。腹部内臓の疾患などは大變すくないのです。それにもかかはらず、その少い胃或は腸のものを年月かけて根氣よく集めて、何か考察しようとして居ます。*Mühsam* は Magengeschwür 12例程を集めて

て見せて呉れました。*Unger* は Pueumokokkenperitonitis を集めて居ました。かういふ風ですから手術の回数はすくなく時たましか手術がないのですが、この時には先生も助手も實に熱心です。又この Virchow-Krankenhaus には pathologische Anatomie, Histologie, Bakteriologie の研究室があつて、Chef が居て研究員を指導して居ます。剖檢室も大變立派で、2週間に一度木曜日に Demonstration があつて、面白い例或は lehrreich の例につき Chef がその顯微鏡的標本、肉眼的標本を説明して居ます。病院の各科の醫長も醫員もこれを聞いて質問をし討論をします。これが私には大變氣に入りました。

鳥潟教授の近詠

病理學の清野教授の需めに應じ 鳥潟教授は新年の試筆に次の様な
長歌 山に對して嘯くの歌を贈られた おう 曠野人は稀なり
吾と山とならでまた何者かあるの概あるもの 敢て世の紛々たるものには示すべからず語るべからず

山

山こそは男兒なれや
そか骨は千引の巖
頭には千本の檜楹
わけ入れは晝たに暗し
佩く大刀と閃き懸り
物皆は變りて行けと
山のみは昔なからそ

山こそは益荒雄なれや
そか筋は黄金くるかね
黒髪といや生ひ繁り
腰邊には千仞の瀧
往き見れば夏たに寒し
白雲を冠とかむり
世の中はいたくさやけと

た。日本の病院には營利的のことばかり考へて居るのもあります、そうでなくても、一度教室をはなれて地方の病院に任ぜられて行くと、唯治療の方面のことにのみ没頭せねばならぬと言ふ口實をもつて、學問から離れて了ふ人が多い様に思ひます。併し、それは事實に於てその人が學問的良心を持たぬからであります。學問的良心さへ持つて居ればその仕事の仕方は當然この Virchow-Krankenhaus に於けるが如くなるわけであります。

日本にも相當に設備のよい大病院があります、そこで働く人は勿論のこと、設備のわるい處で働く人でもその心の持ち方を改めて、正しき方向に進まねばなりません。

これがやがては日本の醫學の全體のレベルを高める礎になるのであります。この事は私

かねて考へて居りましたが獨逸でその實在を目撃しまして、ことに羨しいことに存じました。その他に Berlin の市立病院としては Urban の病院、Westend の病院、Friedrichshain の病院等があつて、そこらの醫長の人、醫員の人みな學問的良心を失はないで眞面目に熱心に仕事をして居ます。我々が學生時代に用ひた診斷學教科書の *Klemperer* は Friedrichshain の病院の内科醫長であります。Westend の病院の外科醫長の *Meyer* は熱心に努力して居ますが、將來なかならず人と思はれます。Neuköln の市立病院の内科醫長 *Hess* は Magengeschwür の患者を澤山あつめて觀察して居ます。*Sauerbruch* の處の Material もここからまはるのが多い様です。

學問と言ふ言葉のついでに、大學の教室に對して一言私見を述べさせていただきます。あちらの外科學教室の制度は日本の夫と大變ちがつて居まして、大體に於て實驗的研究がありません。*Sauerbruch* の所は特別であります。日本の大學の教室は臨床も實驗的研究もやるのでありますから、日本の大學教授の負擔は大きなものであります。従來は教室員がすくなかつたために、社會に正しき醫人を供給せねばならぬ大學の教室としては、教室員を永くとどめておく事が出来なかつたけれども、今日の如く教室員が多くなると、この内から先生を助けることが出来るやうな人が出る様にならないといけませぬ。München 大學の内科學教授 *Friedrich Müller* の教室には助教授が2人居て、1人は臨床的方面の内科學者、1人は純化學者であります。この化學者は *Felix* と言ふ人で、化學的研究の指導をしております。勿論 *F. Müller* は化學に造詣が深いからこの *Felix* の言ふことをよく理解し得るのです。本學内科の井上助教授はこの *Felix* の下で大變立派な仕事を完成せられたのです。この様な風に日本の教室も漸次變化して行つてよいと思ひます。助教授とか講師とかの方々は永く教室におられる方々ですから、教授の研究的方面のお手傳ひをせられるのが至當であります。従つてさう言ふ事に興味と理解とを有し、純正な學徒として精進し得る人でなければなりません。若い方々も、苟くも大學の教室にある方々は、みんなさう言ふ學徒の代りが出来るやうに一日一日の經驗を積んでゆく心がけが必要であります。かくてこそ教室の價値がすんすん向上するものであります。さて教室から出て行く人々も、教室からはなれるのが學問との縁の切れ目と言ふ様に考へずに、教室にあつた間に培はれた學問的良心と興味とをいつまでも打ちすてずに、任地任地で己れの學の殿堂を建設することに努力するのが眞實であります。

つまらぬことを永々と述べましたが、私が獨逸の外科を少しばかり見て感じたこと共を簡単に述べた次第であります。(拍手)。

(以上ハ松本博士が8月25日歐洲ヨリ歸朝サレ、9月20日京大樂友會館ニ於ケル京都外科集談會ノ席上ニテ爲サレタル講演ヲ筆記セルモノニシテ、文責ハ凡テ編輯者ニアリ。)